

國學院大學學術情報リポジトリ

〔インタビュー〕 道標：
翻訳家ピーター・J・マックミラン氏

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: マックミラン, ピーター・J, 豊島, 秀範, Macmillan, Peter J, Toyoshima, Hidenori メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000506

「インタビュ」道標

翻訳家 ピーター・J・マックミラン氏

ピーター・J・マックミラン氏はアイルランド生まれ。アイルランド国立大学を卒業後、渡米し博士号を取得。杏林大学教授などを歴任。日本在住歴三十年。

二〇〇八年『One Hundred Poets, One Poem Each』（英訳・小倉百人一首）で日米友好基金日本文学翻訳賞、日本翻訳家協会日本翻訳文化特別賞を受賞。二〇一六年に伊勢物語の英訳『The Tales of Ise』を出版。二〇一七年、『英語で読む百人一首』を文春文庫より刊行。

本インタビュでは、「百人一首」の翻訳を通して実感された、日本と西洋との文化の違いについて、人間と自然との関わり方を中心に話したいだいた。

（インタビュアー 豊島秀範本学名誉教授）

豊島 『國學院雑誌』の「道標」という企画に、ピーター・J・マックミラン先生にお越しいただきました。「道標」は、『國學院雑誌』を読む文学部の学生諸君にとつて、学習や研究を進める上で必要となる視野を広げ、意識を深めていく上で参考となる、先駆的な研究をなさっている方々からお話をうかがうことを目的とした企画です。

ご承知のように、マックミラン先生は翻訳家であり、詩人であり、芸術家であり、杏林大学でも教えられていらっしゃった研究者でもあります。

マックミラン 杏林大学は、何年前までで、今は、東大の講師と、四月からは東京女子大学非常勤講師になりました。

豊島 マックミラン先生が、二〇〇九年三月に出版された『英訳詩・百人一首 香り立つやまとこころ』（集英社新書）と、

二〇一七年四月に出版された『英語で読む 百人一首』(文春文庫)の二冊を読ませていただきました。そこで本日は、この「百人一首」の翻訳にかかわるお話をお聞きしたいと思います。二冊目は英訳を修正されているのですが、その英語の内容が私には十分にはわからないところもありますので、翻訳をしている娘の実和に助けてもらおうと思いいました。娘は東京外国語大学から東大の大学院で英語学を学んだのですが、現在は翻訳をやっており、よい機会ですので、先生にお会いしているろと学んでほしいと思っております。お許しください。

実和 よろしくお願ひいたします。

豊島 ここでの先生のお話は『國學院雜誌』に載りますが、時間の都合で、多くのことはお聞きできないので、初めに、先生が「百人一首」を翻訳してみようとお思いになった理由や、実際に「百人一首」を英語に翻訳された時の苦心や工夫などについて、お話しただきたいと思ひます。先生の英訳を学生が知って、「百人一首」を英語で読むことで、「なるほど、そういうふうな見方ができるのか」と、今までとは違った面に気づいて、改めて「百人一首」を読み直してみようと思ひますので。マックミラン はい、わかりました。実は昨日も、NHKの取材で全く同じ質問を受けました。私が日本に来たのは三十年前

です。そのときまだ二十代の後半で、日本のことを全く存じあげなくて、冒険のつもりで、一年間の予定で来たんですね。そして、お茶の稽古とか、剣道をしたり、お習字を勉強しているうちに、日本文化に魅了されたんです。その後十五年間、勉強したりしていたんですけども、十五年目になったときに、この後もずっと日本にいるべきか、自分の国に帰るべきかについて、自分のアイデンティティを問う時期がありました。

その時に、私と同じ国籍を持つておられた加藤アイリーンさんが、私がポエム(詩集)を出していることから、「日本の歌集とかを訳してみたら答えが出るんじゃないか」とおっしゃってくださり、どんな歌集を訳せばいいかについては、まずこれじゃないかと推薦していただいたのが「百人一首」でした。そのときは、日本の古典も、文法とかも全く分からなかったので、下に解説が書いてある高校生の教科書などを使いながら勉強をして「百人一首」を英語に訳しました。何年かかかったんですが、アイリーンさんが毎回毎回、丁寧に添削してくださいました。そして、何年か経った時に、アイリーンさんが、「できたね。もういいよ」と認めてくださったのです。そして、今年他界されたドナルド・キーン先生にもお見せくださったのです。キーン先生は絶賛してくださいました。そして、出版してみたらと

おっしゃってください、コロンビア大学から出版することができました。もともとは、本にしようなどということもなく、自分をもつと知ろうとして、文化の異なる日本に住んでいたのですが、「百人一首」の翻訳を出したことで、今まだ日本に住んでいることに対する、その答えが出たということですかね。

豊島 素晴らしいですね。『英訳詩・百人一首』と『英語で読む 百人一首』の両方読ませてもらいましたが、マックミラン先生は二十歳ぐらいの時にアイルランドを出てアメリカに渡り、まもなく日本に來られて、その後はほとんどアイルランドに戻られていないようですね。そのようにして日本文化を学んで、「百人一首」を訳されたわけですが、その翻訳の難しさをお書きになっておりました。「百人一首」の歌には、例えば、「長々し夜をひとりかも寝む」を言いたいがために、「しだり尾の」までもっていった、「長々し」へと引つ張っていくという、それを序詞といっているんですけども、語呂合わせや、駄洒落のようなことを、僕らはごく普通のこととして受け止めているわけですけども、それを英語に訳していこうとすると、小町の歌もそうですが、語呂合わせとか、イメージの重なりなどは、本当に大変だと思います。主語がない場合もありますしね。そのあたりのことで、英訳していくうえで見えてきた日本の文化

とか、日本の言葉の特徴などについて、お話しただきたいのですが。学生たちに、その辺の工夫とか苦労や、面白さなどについて語っていただけると有難いのですが。

マックミラン 豊島先生が答えをだいたいおっしゃっていたと思いますけれども、一番わかりやすい例でいえば、5番の「奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の声聞くときぞ秋はかなしき」の歌ですね。日本語の文法からは、誰が「紅葉ふみわけ」て前へ進んでいるのか断定しにくいですね。歌人自身が前へ進んでいるのか、それとも鹿が前へ踏みわけているのか、文法からではわからない。それはなぜかというところ、主語が記されていないからですね。私とか僕とか、そういう言葉は和歌には出ないんですね、存在しないですね。『万葉集』の時代には多少ありますが、『古今集』とかの時代の歌のほとんどには主語がないですね。それはとても大きな特徴です。

英語の詩、例えばワーズワースの「I wandered lonely as a cloud」という有名な詩がありますが、「I」が中心にあるんですね。考えている個人が宇宙の中心である。ただし、それがずっと西洋の文化であったのではなくて、十七世紀のデカルトという哲学者以来ですね。デカルトという哲学者が、「私が考えることによつて、私が存在している」ということは断定できますよ」

(I think; therefore I am.) というような、有名な発言をなさったんですね。それ以来、西洋の文化では、もちろん英語の詩もそうだけれども、考えている個人が宇宙の中心であり、考えている個人の目を通して、ものを感じたり、詠んだりするわけですね。

ということですので、「百人一首」を英訳するときに、考えている個人の目から紹介すると、英語の読者にとってはとてもすんなりと入れるわけですね。とてもわかりやすい歌になるわけですね。それで、「I hear the lonely deer belling for his love」と訳したのです。ただし、これでは和歌の特徴が紹介できていないですね。それで今、ベンギン・ブックスでは、この英訳を変えて、もとの和歌の表現に忠実に訳してみました。それは日本文化の特徴を理解した上での英訳なのです。西洋文化では「I」というものがおりまして、自然は外にあるわけです。自然を見つめる私が「I wander lonely as a cloud」と雲のように一人でさまよったという訳になりますね。つまり、人間がいて、その外側に自然があるのです。でも、この和歌から理解できるのは、自然は人間の外ではないんですね。関係性がとても曖昧なのです。だから歌人が「I」と主張せずに、「鹿」と主張せずに、わざとではなくて自然にそういうような発言をする

わけですね。それから日本文化と西洋文化との大きな違いが理解できます。西洋文化では一人の個人が自然と対立しているわけですね。けれども和歌の世界では人間が自然と一体化されているわけですね。その両者の関係性がとても曖昧であって、自然の中から歌が詠まれているわけです。なので、和歌の世界と英語の世界は全く異なっています。その例がとてもわかるのが「百人一首」の和歌かなと思います。そこからまた関連して、日本文化と西洋文化との異なっているところはたくさんあります。

豊島 その人間と自然との関わりは、文化の違いの根本的なところですね。

マックミラン ものの見方、知識の入れ方が違いますのでね。



豊島 私は『源氏物語』などをやっています。『源氏物語』にも「私は」という言葉はほとんどないですね。

マックミラン ないですね。『源氏』の中では、使われている敬語などによって関係性がわかるわけですね。日本の古典では、人間というのは他者との関係で成り立っていくわけですね。

豊島 その関係を表わしているのが敬語なんですね。大学院生の時の授業で、一番最初の英訳であるアーサー・ウェーリー『源氏物語』訳を読んだんですが、とても分かりやすいんです。必ず主語が入っているからですが、この主語はこの人だったのだと、改めて考えさせられることもありました。

マックミラン そうしないと伝わらないんですね。英語は主語がないと文章として成り立たないんです。主語がないと先生に怒られます。でも、私の新しい「百人一首」の英訳では、あえてルールを破壊しました。詩の世界では、そういうことが許されるわけですね。

豊島 和歌の場合、この「奥山に紅葉踏みわけ鳴く鹿の」の、ここまですが紅葉踏みわけ鳴く鹿が主語で、「声きくときぎぎ秋はかなしき」というのは作者なのですね。もちろん、「奥山に紅葉踏みわけ」の主語を作者であることとれなくもないんですが、普通は主語は鹿で、下の句のところは主語の記述がないので作

者が主語になる、そのように読んでおりました。けれども、注釈書にはいろいろありますし、マックミラン先生の英訳を拝見して、そうだね、「I wander lonely as a cloud」云々という発想についても考えてみたいと思います。

マックミラン でも、今はまだ新しい訳を推敲しているところですよ。

豊島 それと、マックミラン先生の英訳で興味をひかれたのは、滝が落ちるなど時間的な推移を表す時に、普通は一首を五行で訳しているところを、一行空けて、そこに空間を入れる、という工夫をされていますよね。

マックミラン 流れを感じてもらうためです。

豊島 それは、私にはとても印象的でした。

マックミラン 視覚翻訳は大好きなんです。これも実は視覚翻訳なんですね。これが語呂合わせというか、「足引の山鳥の尾のしだり尾のながし夜を一人かも寝む」の「尾の」の繰り返しですね。これも同じ音を繰り返してみました（The long tail of the copper pheasant trails, drags on and on like this long night alone in the lonely mountains, longing for my love）。

豊島 単語を一つずつ切って、二十五行で記していますが、こ

のような視覚的な表記を、私は初めて見ました。山鳥の尾の見える立での表記法ですよ。ところで、「久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」(紀友則)や「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」(業平)などに見られる「儂さゆえに愛でる」という日本人独特のそうした美意識は、訳し方によっては外国の方にも伝わりますか。

マックミラン それは、実は昨日も別の所で同じ質問をされたのですが、私のライフワークは日本文化を英訳して世界に発信していくことですが、その根本に日本文化を理解できると思わないと発信はしません。私は、三十年前には、外国人がなんで日本文化を理解しようなどとしているんだ、理解できるはずはないと思っていました。だけでも、今はそうは思わずに、ただ異なっているだけであって、概念はそんなに難しくはないと思っっています。特に日本に住めば住むほど、日本の文化は理解できますし、その文化はとても素晴らしい感性であると思えます。

豊島 そうですか。私は、自分にはできないのですが、一番最初の『源氏』訳であるアーサー・ウエーリーの翻訳を読んだり、その他の『源氏』の英語訳はだいたい持っているのですが、この『源氏物語』は日本人が英語などに訳すべきだと思うところ

があるんです。夢のまた夢なのですが、英訳を読んでいて、本文とは違うなあ、などと思うところがあつたのでね。もちろん、そこるところを私には英訳できないのですけれども。

マックミラン いえいえ、それはもしかしらたできるかもしれない。わからないけれど、今私、会社を経営していて翻訳を仕事としてもやっていて、そういう例がこれまでになかったのです。どんなに日本の方がバイリンガルであっても、やっぱり違うんです。逆に、長年、日本に住んでいる外国人で、日本語を母国語のようにしゃべることができて、今度は英語がちょっとおかしくなるんですね。両方ともイコールの方には出会ったことがないんですよ。なので、ぜひとも外国の方とお組みになってほしいと思います。実は私もそれをすごく実感していて、そのためいつも院生とかと組んで訳そうとしています。やはり言葉のニュアンスとかがありますからね。

豊島 まだ私は『伊勢物語』の翻訳を拝見していませんので、これから読ませていただきたいのですけれども。

マックミラン ペンギン・ブックスもぜひ。今ちよつと思つたんですけども、時間も過ぎていきますが、今までののはすごく高度な内容で、学生向けの質問ではないですよ。

豊島 これから学生向けのお話をお願いします。小さいときか

ら「百人一首」を取ったりして、一応それなりに知っている学生は少なくないので、例えば、先生が英訳した「百人一首」を読んだ学生が、実際の英語として成立している詩の世界、詩の表現を知って、「百人一首」と比較することで、そこから学生が学ぶことは大きいと思うんですね。英語の表現ということと、自分が知っている日本語の和歌表現や、その解釈なりがストレートにはいかないというか、和歌の表現を英語に翻訳するというのは、そんなに簡単なことではないんだということを生にわかってもらおうのものすごくいい教材だと思うのです

が。
マックミラン そうですね。私から学生へのメッセージを申し上げていいですか。私が國學院大學で皆さんとご縁があったことは、とても素晴らしいことだと思います。日本の歴史や文化をととても大切にする大学ですし、また神職の勉強もできて、とても素晴らしい環境だと思います。日本の伝統文化や文学を勉強する大学としてですね。そのことに早いうちに気づいていただいて、学生である間に、なるべく日本人としてのアイデンティティとか、日本人として生まれてきてどういう意味があるのか、どのようなところを感謝すべきか、ご先祖様が残してくださった文学とか歌も含めてですね、それを勉強することによって、

どのようなものの方が変わるとかですね。それと海外に留学なさったときとか、外国人と知り合いになったときに、どのように日本文化の素晴らしさを紹介すればいいかなど。例えば、カルタなどをやって音を通したゲームから歌の心を紹介したりとか、「百人一首」の世界から学ぶ日本人の自然に対する一体化している感性とか、日本人が好む美意識ですね。

例えば、桜を儂いから愛でるといふ美意識がありますね。また、日本では四季によつて飾り方が異なっていますね。西洋の家だと何十年も同じ絵が飾られるのですが、日本人はお茶室の中での床の間とかの飾る絵を随時変えますよね。さらには、日本には「和を以て貴しとなす」といふ聖徳太子の言葉があつて、そういう立派な言葉のもとで日本文化は発達してきました。新しい元号ではないですが、「和」は素晴らしいですね。西洋では、そういうことは大切にされながらも、もっと大切なものがあるんですね。

実和 「和」を保った上で、より大切なこと。何ですかね。アイデンティティに関することですか。

豊島 西洋の場合は、やっぱり自己を主張するということですかね。

マックミラン それはそうですね、それよりも「正義」

なんですね。「正義」を最も大切にするわけです。例えば、この前の震災のときに小学校が流されましたが、その後で、親たちの半分は学校を訴えたいと思っていたんですけども、残りの半分の親は「和」を大切にして地元の方を訴えられないと思っ
ていたらいいですね。そういうところで葛藤するわけですね。昔も今も、訴えようとせずに「和を以て貴しとなす」としようとするわけですね。訴えることによって、例えば訴えた親たちのガソリンスタンドを市役所は使用しなかったりとか、そのような軋轢があつたりとかするわけですね。私としては世界の中で両方とも大切だと思っ
ています。「正義」も大事です。「和」も大事です。だけれども今、中東とかで「和をもつて貴しとなす」という精神を教えれば教えるほど、地球に世界に平和が来るわけですよ。だから精神の面とか哲学の面でも、日本は偉大な貢献ができるに違いないということを学生たちに意識して
いただければと存じます。

豊島 今のお話のところはゴシック体で書いておく必要がありますね。だけど、今だんだんと「和を以て貴しとなす」とか、そういう考え方が消えつつあるんですよ。

マックミラン アメリカナイズされてきましたね。

豊島 そのことについて何かありますか。

実和 アメリカがずっと世界の警察みたいな、世界の正義みたいにやつてきて、今ちょっと微妙ですよ。

豊島 それぞれに自分の立場を守ろうとして、いろんな国が動いているところがありますね。そんな中で、先生はご著書の中で、自分は日本の文化を理解しようとしてきたことで、逆に母国アイルランドにいるお母さんのことが思われたと記されていることが印象に残りました。お母さんは文筆家で、お母さんに教わったものが血として流れているでしょうし、お父さんの仕事もまた血として流れているということもおっしゃられています。皆が先生のように外国に行つて、そこに住んで学ぶことができます。それはなかなかできない。先生が示してくださった翻訳という作業が、どれくらい苦労しているかということ学ぶことで、逆に自分の国の文化、自分の感じている意識が相対化され、自覚されることで、両方のことがわかるということ。学生には体験してもらいたいと思います。

二〇〇八年にイタリアに行つて「源氏物語の国際学会」を開いたことがあります。娘にも通訳として同行してもらいましたが、イタリアにローマ大学やヴェネチア大学などを初めとして、日本文学をやっている先生方が七名います。その先生方にも発表をしてもらいましたが、なかなか日本の作品を理解するの

は難しいとのことでした。『源氏物語』をイタリア語に翻訳をしているローマ大学の先生がいました。それまでも『源氏物語』のイタリア語訳が一つあったのですが、それは英語訳からイタリア語に訳したものでした。それで自分は日本語からイタリア語に訳していると言っていました。ただ、その日本語からというのが、日本語の現代語訳からかもしれません。それも仕方がないことだと思います。先生のように、古典和歌である「百人一首」の表現から、直接に英語に訳していくというのは、本当に大変なことだと思います。和歌表現の中には、さまざまな文化が埋まっていますから、それを全部汲み取らないと、訳したことになる。そここのところの大変さを思います。でも、それに挑戦することによって、はじめて両方の文化が見えてくるのでしょうかね。

マックミラン 英語で読んで初めて理解しましたと、多くの日本人が言ってくださいます。古典が読めないですからね。英語は今では誰でも読めますからね。せっかく見えているのですから実和さん、何か質問はないでしょうか。話したいこととか。通訳者としてもいいですし、猫や犬の服のコーディネーターとしてもいいですよ。

実和 今、東大の先生のところで月に一回、翻訳研究会が開か

れていて、翻訳のセオリーから全体を訳す作業まで、毎月いろんなテーマで議論し合うのですけれども、そこで毎回最後に問題になるのが、文字通り訳して通じるところは構わないけれども、裏に個別の文化、特に日本の作品は、先生も書いていらっしやいますが、単語に歴史があるというか、背景に情報がいっぱい詰まっています、それを英語に抜き出すときに、どこまで説明するのが問題になります。例えば虫の名前などは、それを出してもわからないことがあります。いきなり蟬の死骸が出ていても絶対にわからないよねとか言いながら私たちは工夫していくのですけども、そういうカルチャーが重く入っている単語は説明して訳しますか。それとも例えば置き換えたりしますか。英語だったらこの虫だよ、みたいに換えたりとかがしますか。

マックミラン 置き換えたりはすることがあります。例えば「掛詞」がノーマルな掛詞にならないときに、別の言葉の掛詞を使ったりとか、置き換えることもあれば、いろいろな工夫が必要となります。どうしても難しいというときには、注釈という選択もあると思います。ところで今、何か翻訳されていますか。

実和 今私は、フィジーの traditional healing についてやっています。アメリカのハーバードかどこかにいらっしやったサイ

コロジの先生が書かれたものです。

マックミラン フィジーって何ですか。

実和 tropical island.

マックミラン ああ、フィジーの traditional とかそういうのですね。そういうの、私もすごく興味があります。日本のシャーマンとかいますよね。

豊島 私もこの大学の出身ですので、日本にいる「カミ」とか「ユタ」だとか。

マックミラン 昨日は「ユタ」と話しました。奄美大島にいる方です。この前、会いに行きました。

豊島 娘は『宗教学大図鑑』と『政治学大図鑑』（ともに三省堂）、イギリスの本を二冊、翻訳しています。

実和 最近、いろんなものを図鑑にするのが流行っているらしく、写真とかをいっぱい使って、その翻訳をやりました。

マックミラン 今はどんな翻訳をされていますか。

実和 今は、そのフィジーのものしかやっていません。あと、政治のアメリカの populism についての翻訳が、昨日終わったところです。

豊島 私は、先生のご著書を辞書を引きながら読んでいます。私ですが。

マックミラン これ（『英詩訳・百人一首』）よりも、こっち（『英語で読む 百人一首』）の方が。

豊島 新しい方の翻訳ですね。

マックミラン 新しいというか、その間に『伊勢物語』を訳しましたので、ちょっと勉強もしましたから、上手に訳せていると思います。

豊島 これは、英語訳が違っていました。比べてみて、工夫されたなと思って拝見しました。ここでの対談は『國學院雑誌』に掲載して学生に読んでもらいたいと思っていますが、自分が学生だったときは勉強していく上での意味合いと方向性というのが、ちよつと弱かったなと反省しています。授業で「百人一首」を勉強したり、日本の古典文学を学び、現代短歌も長年にわたり作ってきましたが、それらも日本だけで収まっていたは駄目なのだと意識しているのは一人の教員のみで、この人が退職したらもういなくなりますが、それらも言われました。それでは駄目だ、もう少し出ていかなければいけないと思えました。日本の古典研究の分野でも、世界の動向を視野に入れて、マックミラン先生のように外国に出かけるのがよいのですが、それができなければ外国の研究者と共同研究という形をとるなどして研究を進め

ていかなければ、日本だけで止まってしまい、やがてはしほんでしまう。

マックミラン 私は大学で哲学を勉強していたのですが、勉強していた哲学は日本に来ることよって破壊されたんですね。普遍的なんですね、西洋は。すべてのときに断定できない、主張ができないのであれば哲学にはならないというのが基本なんですね。「美」は必ず完璧さや普遍性を持っていると教わったのですが、日本人の美意識である「儂い心」を勉強することによつて、自分が生まれ育った国での概念が破壊されたんです。でもそれは、とても有難いことでした。なぜかというところ、新しいものの見方を身につけることができたからです。だから今は二つの自分があつて、一つは生まれて育った国での見方と、もう一つは日本で教わった見方です。そのように異文化を勉強することによつて自分が大きくなれる、視野が広がるのです。その体験からして、勉強に駄目というのではなく、楽しく勉強しましょう、特に日本文化はとても楽しいですよ、と学生に申し上げたい。今も英訳のカードを作っていて、イベントもたくさんやって、英語でカードやったりして、日本人はすごく楽しい、こういう世界がありますよと、日本文化を外国に紹介したりしています。特に若い学生はみな恋をしている時期ですね。なので恋

愛が多いのですが、自分はこれまで孤独だったが、私だけじゃなかったんだ、みんな苦しんでいたんだ、と古典の和歌などから知ることによつて、学ぶ楽しさを知るのです。

豊島 恋の歌が多いですからね。

マックミラン ええ、そういうことによつて、すごくホッとするとということもあるんですね。最後に申し上げたいのは、新しい元号が『万葉集』から出てきたのはとても誇れることだと思ふし、とても素晴らしい言葉だということですよ。外国ではちょっと偏った解釈をしていて、政治的な意味でとらえている方が多いのですが、私は素直に歌の序文から取られたことがとても美しく、このことから和の文化をこれからも大切にしていけばいいなと思います。ぜひとも今先生が進めている短歌講座や、『万葉集』の巻15、16の授業を受けてもらいたいということをや、先生につくづくと申し上げたいですね。

豊島 ありがとうございます。マックミラン先生の翻訳は、日本の「百人一首」や『伊勢物語』、そしてやがては『源氏物語』にも向かわれると思うのですが、そういった古典を通して、ぜひこれからも日本の古典を世界に広げていってほしいと思います。日本の古典は、日本人でもなかなか理解が難しく、

『万葉集』は千三百年も前であり、『源氏物語』は千年前、「百

人一首」も定家が生まれたのは平安の末ですから約八百年近く前になるわけです。それをこのように英語に訳していただき、我々にはもちろん、世界へ発信していただけるのは、本当に有難いことです。

マックミラン 先生もご指導してください。

豊島 先生の二冊の「百人一首」の翻訳書、面白かったです。

逐語訳ではなく、詩として翻訳なさろうとしている工夫を、より深く理解したいと思います。それにはもっと英語を勉強しなければと。

マックミラン 実和先生がいるから大丈夫ですね。

豊島 そうですね、任せます。予定の時間になりました。今日は長時間にわたり、多くの貴重なお話を伺いすることができました。ありがとうございます。

マックミラン ありがとうございます。

